

教育研究業績書

令和5年5月1日

氏名 金敷 大之

教育上の能力に関する事項

事項	年 月	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書・教材 新しく学ぶ心理学 著者：野村幸正・ <u>金敷大之</u> ・ 森田泰介	平成16年1月 30日	教養教育における教科書として位置づけられた心理学の著書である。共著者として、全10章のうち、第2章「処理洋式の進化」(pp. 27-43)、第4章「心の深層—フロイト」(pp. 69-88)、第6章「文化—人間の特殊性」(pp. 111-126)、第7章「個の総和以上のものをもつ集団」(pp. 127-142)、第9章「適応の根源としての知能、そして智慧」(pp. 157-179)を分担執筆した。
認知心理学基礎実験入門 著者：兵藤宗吉・須藤智(編著)、 安永正史・中山友則・浅野昭 祐・鈴木宏幸・ <u>金敷大之</u>	平成20年5月 7日	心理学の実験実習における教科書として位置づけられた心理学の著書である。全6章のうち、第4章「実験実習」の第8節「自己実演課題(SPTs)—ありありと思い出された情報はどこから来るのか—」(pp. 148-162)を分担執筆した。
図説 教養心理学 著者： <u>金敷大之</u> ・森田泰介(編 著)、中田英利子・山本晃輔	平成23年3月 15日	教養教育における教科書として位置づけられた心理学の著書である。章立て、図表の選定など、編者として中心的な役割を果たした。また、全15章のうち、第3章「学習」(pp. 27-36)、第5章「行為」(pp. 49-64)、第6章「知能」(pp. 65-78)、第8章「対人関係」(pp. 91-106)、第9章「道具と文化」(pp. 107-118)、第12章「無意識」(pp. 141-158)、第14章「神経系」(pp. 171-194)、第15章「心理学の研究について」(pp. 195-210)を分担執筆した。
認知心理学の冒険—認知心理学の視点から日常生活を捉える 著者：兵藤宗吉・野内類(編著)、 浅野昭祐・井濶知美・大坪将・ 大宮宗一郎・ <u>金敷大之</u> ・熊田 孝恒・下田僚・白井述・鈴木 宏幸・須藤智・高野裕治・中 嶋智史・中山友則・西中宏吏・ 日比優子・緑川晶・森田泰介・ 山科満・山本晃輔	平成25年5月 20日	認知心理学の専門教育の教科書として位置づけられた心理学の著書である。全4章のうち、第4章「認知心理学と隣接領域との連携」における、第6節「よく考え抜かれた練習に伴う熟達」(pp. 230-247)を分担執筆した。
図説 教養心理学（増補第2版）	平成28年4月 1日	教養教育における教科書として位置づけられた心理学の著書である。前述『図説 教養心理学』増補第2版として、

様式第4号（教員個人に関する書類）

パネリスト「認知症予防を考える」講演会パネルディスカッション，甲子園大学・宝塚市 地域連携推進事業，於 宝塚市立東公民館	平成29年3月5日	認知症予防について，心理学の観点からパネリストとして講演を行った。メタ認知，という自分自身の技量を推論する能力についての話題を提供した。
講演「コントロール感とは？」甲子園大学市民公開講座，於 甲子園大学	平成30年3月8日	精神的健康に関係するコントロール感について，内的・外的の意味を交えながら講演した。

担当授業科目に関する研究業績等

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数 (総ページ数)	概要
心理学基礎 実験実習1 (心理学実験1) 心理学基礎 実験実習2 (心理学実験2)	(著書) 1. 認知心理学 基礎実験入門	共著	平成20年5月	八千代出版	pp. 148-162	(再掲のため略)
心理学研究 調査法(心理学研究法1)	(学術論文等) 1. 日本版 ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発	共著	平成17年10月	奈良教育大学 紀要 人文・社会科学	第54巻 1号 43-47.	本研究は，人の情動を理解したり，みずからの情動を制御したりする技能についての，一般的な特性を測定する尺度を開発することを目的とした。その結果，情動の技能においては，他者の情動の理解，自己の情動の表出，自己の情動の制御という3因子が関与していることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：尺度項目の作成，外国語の翻訳，調査の施行，データの分析) 著者：豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治
社会調査演習1 社会調査演習2 質的調査法 特論	(学術論文等) 1. 畿央大学生の携帯電話利用に関する現状調査	共著	平成19年3月	畿央大学 紀要	第6号, 51-58.	指導教員として当たった瓜野貴之の卒業論文を紀要論文としてまとめたものである。畿央大学の学部生が，さまざまなコミュニケーションを行う際に，対面，電話，メールのいずれを用いるかを選択させる調査を行った。その結果，何らかの謝罪を行う際に，男性は対面あるいは電話，女性はメールという男女差が明らかとなった。 著者：瓜野貴之・金敷大之

様式第4号 (教員個人に関する書類)

						(金敷の担当箇所:調査計画の立案の支援, 分析の支援, 論文執筆の指導, 紀要論文執筆の指導)
心理学統計法1 心理学統計法2	(学術論文等) 大学受験英単語—日本語450対の主観的熟知価 —メタ記憶研究のために—	共著	平成25年3月	畿央大学紀要	第10巻第1号, 7-16.	メタ記憶の研究において, 対連合学習パラダイムを用いて実験を行うための材料の標準化を行った。大学受験英単語と, その日本語訳である漢字二字熟語の組み合わせについて, 大学生が熟知価を評定した。また, 英語の得意不得意や, 大学入試の形式との関係について分析を行った。その結果, 英語が得意な学生ほど, 熟知価を高く見積もる傾向があり, かつ大学入試において英語を選択して受験した学生は選択しなかった学生よりも熟知価を高く見積もる傾向があった。 著者: 金敷大之・山本晃輔 (金敷の担当箇所: 調査計画の立案, 調査項目の選定, 調査の実行, データの分析, 論文の執筆)
高齢者心理学(発達心理学3)	(学術論文等) 行為事象記憶の自由再生に関する観察 —大学生および退職者女性を参加者として—	単著	平成16年3月	教育科学セミナー (関西大学文学部教育学科)	第35巻, 55-68.	行為事象記憶について, 大学生および退職者女性を実験参加者としての事例研究を行った。その結果, 自由再生においては, 退職者女性においてはありありと再現されている気づきを伴う想起が行われていることが明らかとなった。また, 大学生においては, 記憶の情報源に関して正確に判断して出力を行っていることが明らかとなった。
ヒューマンファクターとデザインの心理学	(学術論文等) 擬態語から色への連想についての研究 —色相およびトーンへの連想—	単著	平成28年3月	甲子園大学紀要	第43号, 101-103.	本研究は, 擬態語(オノマトペ)から喚起される色のイメージの構造を明らかにすることが目的であった。40の擬態語から, 色相12, およびトーン13を強制選択することを調査協力者に求め, それぞれをコレスポネンス分析することで構造を明らかにした。その結果, 色相においては興奮—沈静, 寒い—暖かい, の2次元が, トーンにおいては明度および彩度の2次元が見出された。

様式第4号 (教員個人に関する書類)

<p>学習・発達論</p>	<p>(著書) 認知心理学の冒険－認知心理学の視点から日常生活を捉える 著者：兵藤宗吉・野内類(編著)，浅野昭祐・井潤知美・大坪将・大宮宗一郎・<u>金敷大之</u>・熊田孝恒・下田僚・白井述・鈴木宏幸・須藤智・高野裕治・中嶋智史・中山友則・西中宏吏・日比優子・緑川晶・森田泰介・山科満・山本晃輔</p>	<p>共著</p>	<p>平成 25 年 5 月 20 日</p>	<p>ナカニシヤ出版</p>	<p>pp. 230-247</p>	<p>(再掲のため略)</p>
<p>その他</p>	<p>(著書) 1 新しく学ぶ心理学 2 認知心理学基礎実験入門 3 図説 教養心理学 4 認知心理学の冒険－認知心理学の視点から日常生活を捉える 5 図説 教養心理学 (増補第2版) (学術論文) 1 行為事象の記憶における記銘形態の処理</p>	<p>共著 共著 共著 共著 共著 単著</p>	<p>平成 16 年 1 月 30 日 平成 20 年 5 月 7 日 平成 23 年 3 月 15 日 平成 25 年 5 月 20 日 平成 28 年 4 月 1 日 平成 11 年 3 月 31 日</p>	<p>二瓶社 八千代出版 ナカニシヤ出版 ナカニシヤ出版 ナカニシヤ出版 基礎心理学研究 第 17 巻 2 号</p>	<p> 79-84</p>	<p>(再掲のため略) (再掲のため略) (再掲のため略) (再掲のため略) (再掲のため略) 被験者実演課題 (SPTs) の高い再生成績は，記銘形態 (情報源) の体制化による影響であるかどうかを，自由再生およびソースモニタリング課題を用いて検討した。その結果，記銘形態の体制化は見られなかったが，SPTs の再生成績は対照条件の再生</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>2 被験者実演課題における項目特定処理説の検討</p>	<p>単著</p>	<p>平成 12 年 3 月 31 日</p>	<p>基礎心理学研究 第 18 巻 2 号</p>	<p>149-155.</p>	<p>成績を上回り、被験者の運動行為によって SPTs の再生成績が高められていることが明らかとなった。</p> <p>SPTs の符号化を説明する理論として、項目特定処理説があげられる。本研究では、項目特定処理説の妥当性を、実験者呈示精緻化および自己生成精緻化の枠組みを用いて検討した。その結果、先行研究と同様、SPTs においては実験者呈示精緻化および自己生成精緻化の効果は見られず、項目特定処理説が妥当であることが明らかとなった。</p>
	<p>3 行為事象の記憶における被験者の運動行為と言語的処理の効果</p>	<p>単著</p>	<p>平成 12 年 6 月 25 日</p>	<p>心理学研究 第 71 巻 2 号</p>	<p>89-95.</p>	<p>本研究は、SPTs の符号化過程と実験者実演課題(EPTs)のそれとの差異を検討した。SPTs における被験者の運動行為が実際の記憶成績にどのような影響をもたらしているかを実験的に明らかにした。その結果、SPTs の符号化では、被験者の運動行為情報と言語的情報とが統合されていることが示唆された。</p>
	<p>4 運動パターンの作動記憶—二重課題法における身体運動スパンと手指運動スパンの比較から— (著者：金敷大之・藤田哲也・齊藤智・加藤元一郎)</p>	<p>共著</p>	<p>平成 14 年 2 月 25 日</p>	<p>心理学研究 第 72 巻 6 号</p>	<p>522-527.</p>	<p>本研究は、行為の作動記憶、特に運動パターンの作動記憶において、運動構成要素の処理が関与しているかどうかを、メモリスパン課題を用いて検討した。その結果、運動パターンの作動記憶では、言語的構成要素とは異なる運動固有の処理がなされていることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：実験材料の作成、実験の施行、論文の執筆)</p>
	<p>5 被験者実演課題の記憶範囲に対する同時並行課題の影響</p>	<p>単著</p>	<p>平成 14 年 9 月 30 日</p>	<p>基礎心理学研究 第 21 巻 2 号</p>	<p>1-10.</p>	<p>本研究は、論文「運動パターンの作動記憶—二重課題法における身体運動スパンと手指運動スパンの比較から」に基づいて、SPTs の符号化において、どのような構成要素の処理が関与しているかを二重課題法によって明らかにした。その結果、SPTs の符号化には、運動構成要素の処理のみが関与していることが明らかとなった。この結果は、SPTs の符号化に言語的構成要素および運動構成要素の処理が二重に関与するという、先行研究の結果とは食い違っている。</p>

様式第4号 (教員個人に関する書類)

	<p>6 行為事象および被験者実演課題の記憶</p>	<p>単著</p>	<p>平成14年12月10日</p>	<p>心理学評論第45巻2号</p>	<p>141-163.</p>	<p>本研究では、この結果の食い違いを説明するための論議を行った。</p> <p>本論は、これまでの行為事象記憶研究、SPTs研究の成果に基づいて、新たな理論の可能性を論考し、今後の研究の方向性を示した展望である。本論では、被験者の自己意識、特に記憶における自己認識的意識の重要性が示され、個体発達の観点から行為事象記憶およびSPTsの記憶を検討する必要が示唆された。</p>
	<p>7 行為事象記憶の自由再生に関する観察—大学生および退職者女性を参加者として—</p>	<p>単著</p>	<p>平成16年3月31日</p>	<p>教育学セミナー(関西大学文学部教育学科)第35巻,</p>	<p>55-68.</p>	<p>(再掲のため略)</p>
	<p>8 被験者実演課題の系列再生における新近性効果</p>	<p>単著</p>	<p>平成16年12月1日</p>	<p>畿央大学紀要第2号,</p>	<p>25-31.</p>	<p>本研究は、被験者実演課題の符号化における示差性の高さが、行為事象の系列再生成績を阻害しているのではないかという仮説のもとで、実験的検討を行った。その結果、被験者実演課題条件においては、新近性項目が系列再生時にふと思いついてきてしまうために、順序立てた再生が阻害されていることが明らかとなった。</p>
	<p>9 日本版ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発 著者：豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年10月31日</p>	<p>奈良教育大学紀要人文・社会科学第54巻1号</p>	<p>43-47.</p>	<p>(再掲のため略)</p>
	<p>10 被験者実演課題の系列再生における新近性効果の検討(2)</p>	<p>単著</p>	<p>平成17年12月1日</p>	<p>畿央大学紀要第3号,</p>	<p>13-16.</p>	<p>本研究は、論文「被験者実演課題の系列再生における新近性効果」に引き続き、被験者実演課題の符号化における示差性の高さが、行為事象の系列再生成績を阻害しているのではないかという仮説のもとで、実験的</p>

様式第4号 (教員個人に関する書類)

	<p>11 ゴミの分別に関する判断についての研究 著者：金敷大之・松本千絵美</p>	<p>共著</p>	<p>平成18年12月1日</p>	<p>畿央大学紀要第4号,</p>	<p>23-26.</p>	<p>検討を行った。符号化とは逆順の系列再生が行われた結果、被験者実演課題条件の再生成績は、他の条件よりも高く、行為事象の系列再生が困難であるのは、系列再生時に新近性項目がふと思い浮かんでしまうためであることが明らかとなった。</p> <p>学部生の授業「プロジェクト・ゼミ」における成果を論文にしたものである。ゴミの分別について、燃やすゴミ-燃やさないゴミの判断が、本来燃える-燃えないの判断にどの程度影響を受けているのかを明らかにした。その結果、被調査者が燃えると判断したものを、燃やすゴミであると判断してしまうバイアスが見られた。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、論文の執筆)</p>
	<p>12 誘導尋問に対する回答選択肢呈示の効果 —グドジョンソン被暗示性尺度(GSS)の再検討—</p>	<p>単著</p>	<p>平成19年3月31日</p>	<p>畿央大学紀要第5号,</p>	<p>45-51.</p>	<p>グドジョンソン被暗示性尺度の選択肢の設計によって、誘導尋問に被験者が引っかけやすくなるのかどうかを検討した。その結果、質問に対して被調査者に自由回答させた場合には、“知らない”・“そのような事態はなかった”などと選択肢が準備され被調査者に強制選択させた場合よりも、誘導尋問により引っかけやすいという傾向が見られた。</p>
	<p>13 畿央大学生の携帯電話利用に関する現状調査 著者：瓜野貴之・金敷大之</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年10月31日</p>	<p>畿央大学紀要第6号,</p>	<p>51-58.</p>	<p>(再掲のため略)</p>
	<p>14 色と色名との関係についての現状調査 —11肢強制選択による色見本の命名— 著者：金敷大之・福井将大・今井太一・栗林友和・中谷威登・高松靖光・</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年3月31日</p>	<p>畿央大学紀要第7号,</p>	<p>31-38.</p>	<p>学部生の授業「プロジェクト・ゼミ」における成果を論文にしたものである。色見本を、色名カテゴリーの11肢強制選択によって被調査者に分類させることで命名させる調査を行った。論文においては、その基礎データを掲載した。その結果、色カテゴリー間の境界は曖昧ではあるが、ほとんどすべての被調査者が特定の色名を選択するものもあり、特に暖色系において色名の典型色が見て取れ</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>辻本秀彰・池田由佳・岡本裕樹・白倉武</p>					<p>ることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案，調査項目の選定，調査の実行，論文の執筆)</p>
	<p>15 行為事象記憶の自由再生と回想経験の検討</p>	<p>単著</p>	<p>平成 20 年 11 月 28 日</p>	<p>畿央大学紀要第 8 号，</p>	<p>15-20.</p>	<p>被験者実演課題の再生において，個々の項目の示差性の高さが，ありありと思ひ浮かぶ経験を伴う想起をもたらすという仮説を検証するための実験を行った。順向干渉パラダイムを用いて，被験者実演課題，実験者実演課題，および言語課題の再生成績および主観的回想経験を比較した。その結果，実験者実演課題および言語課題においては，順向干渉からの解放試行においてのみ回想経験を伴う再生が多くなるのに対して，被験者実演課題においてはそのような傾向は見られず，仮説が妥当であることが明らかとなった。</p>
	<p>16 行為事象記憶の自由再生と回想経験の検討(2)</p>	<p>単著</p>	<p>平成 21 年 3 月 31 日</p>	<p>畿央大学紀要第 9 号，</p>	<p>43-47.</p>	<p>論文「行為事象記憶の自由再生と回想経験の検討」に引き続き，被験者実演課題の再生において，個々の項目の示差性の高さが，ありありと思ひ浮かぶ経験を伴う想起をもたらすという仮説を検証するための実験を行った。全 3 試行の累積再生課題を行い，被験者実演課題，実験者実演課題，および言語課題の再生成績および主観的回想経験を比較した。その結果，実験者実演課題および言語課題においては，回想経験を伴う再生が試行に連れて多くなるのに対して，被験者実演課題においては全試行ともに回想経験を伴う再生率が非常に高く，仮説が妥当であることが明らかとなった。</p>
	<p>17 絵本の思い出 —大学生における物語の自伝的記憶についてのプロトコル研究— 著者：金敷大之・山本晃輔</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 11 月 30 日</p>	<p>畿央大学紀要第 10 号，</p>	<p>11-20.</p>	<p>大学生を被調査者として，子供の頃に読んで印象に残っている絵本の自伝的記憶について調査した。また，その絵本の筋書きやストーリーについてできるだけ正確に思い出さよう記述させた。その結果，保持期間 10 年以上を経過すると，ほとんど話は省略され，“〇〇な話”というように他者に説明する思い出し方をする傾向が高いことが明らかとなった。物語の要旨や世界観が，詳細な語句よりも保持されやすいという点で，先</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>18 線画の反復呈示における言語ラベルの効果</p>	<p>単著</p>	<p>平成 22 年 10 月 31 日</p>	<p>畿央大学紀要第 12 号,</p>	<p>41-44. 非言語材料である線画の反復再生を行う際に、言語ラベルが記憶の変容にどの程度影響を与えるかを明らかにする実験が行われた。その結果、言語ラベルなし条件では線画を囲む地の枠線を再現する傾向があるのに対して、言語ラベルあり条件では試行につれて枠線を再現しなくなる傾向が見て取れた。言語ラベルが枠線を省略し線画のみを描くよう方向づけていくことが明らかとなった。</p> <p>行研究を追認するものである。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、データの分析、論文の執筆)</p>
	<p>19 絵本を手がかりとした幼少期における自伝的記憶の内容分析 著者：山本晃輔・金敷大之</p>	<p>共著</p>	<p>平成 22 年 3 月 31 日</p>	<p>教育実践総合センター研究紀要(奈良教育大学)第 19 号,</p>	<p>47-51. 論文「絵本の思い出」に引き続き、幼少期の自伝的記憶の特徴を明らかにするために、絵本を手がかりとして想起される自伝的記憶についての調査を行った。その結果、絵本をめぐる経験エピソードについては、誰と一緒に読んだかなどの“人”を中心とした内容がもっとも多かった。また、10 歳以上で読んだ絵本については、“場所”に関する内容が多かった。</p> <p>(金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、データの分析)</p>
	<p>20 クイズ問題の再生における全体得点の予想 —テストの繰り返しによる過小確信効果について—</p>	<p>単著</p>	<p>平成 23 年 3 月 31 日</p>	<p>畿央大学紀要第 13 号,</p>	<p>37-41. メタ記憶において、テストを繰り返していくごとに自己評価が低く過小評価になる現象が知られている。本研究は、このテストの繰り返しによる過小評価が、実際にテストの繰り返しによるものかどうかを明らかにすることが目的であった。その結果、テストを繰り返すだけで過小評価が生じることが明らかとなり、それは自己評価をする際に呈示されている情報について熟知しているためであると解釈された。</p>
	<p>21 課題の繰り返しが全体成績のメタ認知的予測に与える効果</p>	<p>単著</p>	<p>平成 24 年 3 月 31 日</p>	<p>畿央大学紀要第 9 巻第 1 号,</p>	<p>23-28. 本研究は、論文「クイズ問題の再生における全体得点の予想」に引き続き、テスト課題の繰り返しに伴って、テスト成績の見積もりが過小評価になっていく現象のモニタリング過程を明らかにすることが目的であっ</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>22 自己評定質問紙は課題成績の予測値を予測するか — 方向感覚質問紙・認知的熟慮性—衝動性尺度およびメンタル・ローテーション課題間の相関研究—</p>	<p>単著</p>	<p>平成 25 年 3 月 31 日</p>	<p>畿央大学紀要第 10 巻第 1 号,</p>	<p>1-6</p>	<p>た。意味記憶における概念流暢性課題を用いて、その算出数を予測と実測を繰り返した結果、第 2 試行以降に参加者は過小評価するようになり、参加者の課題経験に基づいて予測が行われる方向で判断基準が変化することが明らかとなった。</p> <p>本研究は、遂行される当該の課題成績の予測値が、自己評定質問紙によって測定されるメタ認知的知識に基づいているかどうかを、相関研究によって明らかにすることが目的であった。調査における課題についてはメンタル・ローテーション課題が用いられ、自己評定質問紙については方向感覚質問紙および認知的熟慮性—衝動性尺度が用いられた。その結果、課題の実測得点および課題遂行の実測時間を自己評定質問紙によって予測することは可能だが、課題遂行前に見積もられた予測得点および実測時間を予測できなかった。</p>
	<p>23 大学受験英単語—日本語 450 対の主観的熟知価 —メタ記憶研究のために— 著者：金敷大之・山本晃輔</p>	<p>共著</p>	<p>平成 25 年 3 月 31 日</p>	<p>畿央大学紀要第 10 巻第 1 号,</p>	<p>7-16.</p>	<p>(再掲のため略)</p>
	<p>24 記憶モニタリングにおける手がかり熟知性 プラス アクセス可能性について —概観—</p>	<p>単著</p>	<p>平成 25 年 12 月 31 日</p>	<p>畿央大学紀要第 10 巻第 3 号,</p>	<p>5-14.</p>	<p>メタ記憶におけるモニタリングの過程について、文献展望を行ったものである。モニタリングにおいては、第 1 段階として、モニタリング判断時に呈示されている手がかりを熟知しているかどうかの認知過程があり、第 2 段階として、その手がかりから思い出すべきターゲットを検索できるかどうかの判断過程があるという。本論では、この 2 段階説(手がかり熟知性+アクセス可能性)に至るまでの研究史、実験手続き、適用できる範囲などを詳細に考察した。</p>
	<p>25 場所に対する感情についての探索的因子分析的検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成 26 年 6 月 31 日</p>	<p>畿央大学紀要第 11 巻第 1 号,</p>	<p>39-44.</p>	<p>学部生の授業「社会心理学調査演習」における成果を論文にしたものである。場所の写真刺激 441 枚について、100 の形容詞の観点から喚起される</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>一演習授業における研究報告一 著者：金敷大之・森遥・山本悠太・溝島尚・坂谷千紘</p>					<p>感情について評定調査を行った結果を探索的に因子分析した。その結果、5 因子構造が見出され、そのうち 4 因子は、快一不快の次元、覚醒一睡眠の次元と対応していたが、残り 1 因子については親密性が関与する感情であることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、論文の執筆)</p>
	<p>26 擬態語から色への連想についての研究 一色相およびトーンへの連想一</p>	<p>単著</p>	<p>平成 28 年 3 月 18 日</p>	<p>甲子園大学紀要 第 43 号,</p>	<p>101-103.</p>	<p>(再掲のため略)</p>
	<p>27 他者の動機づけを推論する際の手がかりについて</p>	<p>単著</p>	<p>平成 29 年 3 月 17 日</p>	<p>甲子園大学紀要 第 44 号,</p>	<p>79-81.</p>	<p>本研究は、他者の動機づけを推論する際に、特に重視される手がかり情報を特定し、その分類を行うことであった。126 名の調査協力者が、他者の動機づけを読み取る際の手がかり情報を、重視するかどうかの評定を行った。主成分分析を行った結果、観察者が直接観測できる手がかり情報の成分と、観察者が推論することで判断できる間接的な手がかり情報の成分とが見出された。</p>
	<p>28 ながら歩き・歩きスマホに関する調査 著者：金敷大之・南雄太郎</p>	<p>共著</p>	<p>平成 29 年 3 月 17 日</p>	<p>甲子園大学紀要 第 44 号, 65-68.</p>	<p>79-81.</p>	<p>本研究は、最近問題になっている、ながら歩き・歩きスマホの実態調査を行うことが目的であった。まず、阪急梅田駅のコンコースにおいて、ながら歩きの人数を数え上げる観察が行われた。その結果、ながら歩きを行う実数は朝のラッシュ時が多いのに対して、ながら歩きを行う人数の割合は夜が多いことが明らかとなった。次に、大学生を調査協力者とした、ながら歩きの実態調査が行われた。大学生 288 名が調査に回答した結果、45%の学生が、ほぼ毎日あるいは 2-3 日に 1 回程度の、ながら歩きを行っていることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：研究全体の企画立案、論文の執筆)</p>
	<p>29 市民公開講</p>	<p>共著</p>	<p>平成 29 年 3</p>	<p>甲子園</p>	<p>69-72.</p>	<p>本論文は、平成 28 年 3 月、甲子園大</p>

様式第4号 (教員個人に関する書類)

	<p>座「もの忘れと上手につきあうコツ」の概要—日常生活のメタ記憶と受診意思決定との関連性— 著者：上野大介・金敷大之・金綱知征</p>		<p>月 17 日</p>	<p>大 学 紀 要 第 44 号,</p>	<p>学で実施された市民公開講座の報告書である。上野・金敷・金綱が企画および実施したワークショップ「もの忘れと上手につきあうコツ」において、実施状況および受講生のインタビュー記録が記載されている。 (金敷の担当箇所：ワークショップの企画，ワークショップのファシリテーター)</p>
	<p>30 日常生活のポジティブな出来事の想起の機能について</p>	<p>単著</p>	<p>平成 30 年 3 月 19 日</p>	<p>甲 子 園 大 学 紀 要 第 45 号,</p>	<p>51-53. 本研究は、日常生活における「小さな幸せ」すなわちちょっとした幸運や出会いなどの想起における心理的機能を明らかにすることが目的であった。4年生大学生90名が調査協力者となり、ポジティブな出来事を箇条書きで記述した。出来事の記述数とストレスサー尺度とは無相関であったが、出来事の記述数と生きがい感尺度との間に正の相関が有意であった。現在の満足感の高い者が、ポジティブな出来事を思い出すことで満足を再確認していると考えられる。</p>
	<p>31 忘れ物・失くし物に関するメタ認知—物品に関連する記憶の自己評価—</p>	<p>単著</p>	<p>平成 31 年 3 月 19 日</p>	<p>甲 子 園 大 学 紀 要 第 46 号,</p>	<p>9-12. 本研究は、日常生活における忘れ物・失くし物に特化した自己評価を分類・整理することが目的であった。大学生，社会人，高齢者251名が36項目の忘れ物・失くし物に関する質問紙に自己評定で回答した。因子分析の結果，作動記憶のエラー，コミッションエラー，持っていく／帰る物のエラー，落とし物・失くし物，不安・確認，食べ物・買い物エラー，メモのエラーの7因子が見出された。</p>